様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ６ 月 １１ 日現在

機関番号：１３１０３
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2011～2013
課題番号：２３５２０２１６

研究課題名（和文）小川未明小説全集（小品・評論・随筆を含む）未収録作品の調査・収集と研究

研究課題名（英文）Collection and research of works which are not recorded on "Ogawa Mimei novel complete works"

研究代表者
小埜　裕二（ONO, Yuji）

上越教育大学・学校教育研究科（研究院）・教授

研究者番号：００２０４２５６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,000,000円、（間接経費）　　600,000円

研究成果の概要（和文）：１、小川未明の『小説全集』未収録作品の収集。『小説全集』未収録作品約1750編をほぼ全編収集した。２、初出誌紙不明童話の調査。初出不明作品約400編のうち約250編を明らかにした。３、未明小説の再検討。研究会及びシンポジウムを開き、成果を『解説小川未明小説１』（永田印刷出版部）で公表した。４、全集未収録作品及び書誌情報の公開。『小川未明小説書誌』の刊行準備を進めている。

研究成果の概要（英文）：1: About the novels which is not recorded on complete works, all 1750 pieces were collected. 2: About investigation of the novels which was unknown as for the published years, 250 pieces were clarified. 3: About reexamination of Ogawa Mimei novels, we carried out a meeting for the study many times and symposium. The result was published to " Commentary of Ogawa Mimei novels 1" (Nagata publication). 4: About public presentation of works which is not contained in complete works, and of bibliographic information, "Ogawa Mimei novels bibliography" is published.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学、日本文学

キーワード：小川未明　小説　童話　全集　書誌

１．研究開始当初の背景

（１）新潟県上越市に生まれた小川未明は、上越地域の市民には郷土の作家として身近な作家である。だが全国的には、周知された作家とは必ずしも言えない状況にある。未明は、2011 年に没後 50 年、2013 年に生誕 130 年を迎えた。明治末から昭和 30 年前後まで 50 年間の長きにわたって、息の長い文学活動をした未明の存在の大きさと文学的・社会的意義は、いまだ理解されていない。

未明の文学活動は、童話・小説・小品・詩・随筆・感想・評論等と多岐にわたる。小説約 700 編、童話約 1200 編、その他約 1300 編と膨大な数の作品を生み出した。しかし作品数の多さゆえに、全集に収録されなかった作品も多く、書誌情報も未整理のまま現在にいたっている。未明文学の特質や意義を明らかにするためには、一次資料となるテクストの収集とその公開、書誌情報の提供が必要な課題となっていた。

『定本小川未明童話全集』（講談社、昭和 52、以下『童話全集』と略す）は童話作品を全 16 巻に編集したものだが、全童話の約 3 割が未収録となっていた。また、初出誌紙が不明の童話が約 4 割あった。

『定本小川未明小説全集』（講談社、昭和 54、以下『小説全集』と略す）は小説・小品・随筆･感想･評論を全 6 巻に収めたものだが、全小説・小品の約 7 割、全感想・評論・随筆の約 8 割が未収録となっていた。また、初出誌紙が不明のものが約 3 割あった。

2008 年度から 2010 年度の 3 年間にわたっては、科学研究費補助金を得て、『童話全集』未収録作品の収集、初出誌不明童話の調査、及びその公開を中心に研究を進めてきた。その成果は、『小川未明童話書誌』（2012 年 12 月、日外アソシエーツ）、『小川未明新収童話集』（全 6 巻、2014 年 1～3 月、日外アソシエーツ）を通して、広く社会に還元した。

しかしながら、『小説全集』未収録作品の収集、初出誌不明作品の調査は研究開始当初、ほぼ手つかずの状態にあった。

（２）小川未明は童話作家として有名であるが、その童話世界は、小説家としての未明の存在がなければ、誕生しなかった。未明は熾烈に日本近代の諸問題と向き合った作家の一人である。「富める者が、貧しき者の前にて、暴慢に振舞ひ、同情がなかつた」（『日本の子供』文昭社、昭和 13 年 12 月、「青年に与ふ」）当時の社会を、未明は憤った。未明は資本主義社会の弊を説き続けた作家の一人であった。

明治 37 年に小説「漂浪児」で文壇にデビューしたとき、未明は 22 歳であった。それ以後、未明は盛んに小説を発表し続ける。大正 15 年、いわゆる〈童話作家宣言〉をして、未明は小説の筆を折る。そのとき未明は 44 歳であった。22 年間、未明は小説を書き続けたことになる。この時期は、大正文学の百花繚乱の時代であった。自然主義がリアリズムで捉えようとした現実社会の問題を、未明は人間の心の問題として凝縮し、象徴的に描きだした。山室静の言葉を借りれば、大正期の未明は小説世界において「独自の世界をもつ先鋭で多産な作家として、文壇の第一線を堂々と歩んでいた」（『小説全集』解説）。

だが未明の 50 年にわたる文学活動のうち、光が当たっているものは、わずかに大正期の童話程度である。小説家としての未明に光があてられることは少なかった。22 年間の小説執筆の活動期には、小説のテーマ・スタイル等の変遷もあった。その推移・展開についても明らかになっていないのが研究開始当初の実状であった。

２．研究の目的

研究開始当初の背景および問題点をふまえ、本研究では、基礎資料の欠如を補うべく、まず『小説全集』未収録作品の収集および初出誌不明作品の出典調査を行い、そののち未明小説全体の再検討及び小説と童話の関わりを考えることとした。

また、研究成果の公開は、複数の刊行物、シンポジウムを通して行うこととした。

以上をまとめると、研究の具体的な目的は、次の５点となる。

（１）『小説全集』未収録作品の収集
（２）小説等出典不明作品の調査
（３）『小説全集』未収録作品をふくめた未明小説の再検討
（４）小説と童話とのかかわりの検討
（５）『小説全集』未収録作品・出典・研究成果の公開

３．研究の方法

（１）『小説全集』未収録作品の収集

『小説全集』全 6 巻の収録小説数は小説 158 編、評論 95 編の計 253 編である。『小説全集』刊行時点において、小説その他の作品についてタイトルが明らかになっているものは約 1350 編あった。予備調査で新資料と呼べる未明作品が他に約 650 編あることが判明している。合計 2000 編が現在、童話以外の未明作品としてカウントできる数値である。

全集収録作品数が約 250 編であるから、残り約 1750 編を今回、収集の対象とした。単行本収録作品から収集をはじめ、単行本未収録のものは初出誌により、単行本未収録でかつ初出誌不明のものは初出誌調査の結果をまって収集を行う。雑誌の索引等を用いて、新資料の発掘を続けるとともに、テクストの収集を行う。

（２）小説等出典不明作品の調査

『小説全集』全 6 巻の刊行時点で、小説その他タイトルが明らかになっている約 1350 編のうち、初出誌が判明している作品は約 950 編、不明の作品は約 400 編であった。前述のとおり新資料と呼べる未明作品が他に

約 650 編あるが、それらは初出誌が判明している作品であることから、2000 編の作品のうち、約 400 編の作品を対象に初出誌の出典調査を行うこととした。
　童話の出典調査の経験を活かし、このたびの調査においても国会図書館、日本近代文学館等の逐次刊行物の閲覧作業を通して調査を進めていく。

（３）『小説全集』未収録作品をふくめた未明小説の再検討
　『小説全集』全 6 巻を読んだのち、『小説全集』未収録作品を読み、その全容を理解する。小説の特質と変遷について考えるさいには、同時期に発表された未明の感想・評論も参照する必要がある。「未明小説研究会」を立ち上げ、未明小説の再検討を行う。

（４）未明童話とのかかわりの検討
　未明童話については初出誌調査が進んだことで、どの時期にどのような内容の童話が書かれたかが分かるようになった。その成果をふまえ、このたびの小説の出典ならびに内容と関連づけながら、童話と小説・評論等とのかかわりを考える。未明文学の足跡は、童話だけでは捉えることができない。小説・評論の特質をふまえ、童話と小説の関係を往還的に捉えていく。

（５）『小説全集』未収録作品および出典、研究成果の公開
　『小説全集』未収録作品を文字化し、刊行する準備を進める。書誌情報に関する研究成果については単行本にまとめる。平成 25 年度には上越市において未明小説に関すシンポジウムを開催し、広く研究成果の公開を行う。

４．研究成果
（１）研究年度別の研究成果概観。
①　平成 23 年度には、単行本収録作品約 400 編、単行本未収録作品約 300 編を収集した。小説以外の小品、評論、随筆等は当初考えていた以上の数にのぼることが判明した。特に雑誌のアンケートに応えるかたちで未明が書いた文章を多数発掘した。出典調査については、初出誌不明作品 400 編のうち、約 150 編について出典を明らかにした。また未明小説の再検討を行うために、平成 23 年 12 月から、上越市民とともに「小川未明小説研究会」を立上げ、月１回の研究会を実施した。

②　平成 24 年度には、『小説全集』未収録作品を約 600 編収集した。残りは約 450 編となった。全集出典不明作品の調査は、図書館等における調査の結果、平成 24 年度は約 100 編の初出を明らかにした。『小説全集』未収録作品をふくめた未明文学の再検討は、「小川未明小説研究会」の活動を通して行った。出典情報の公開に向けて、『小川未明小説書誌』（平成 27 年刊行予定）の整理を始めた。

③　平成 25 年度には、『小説全集』未収録作品の残り約 450 編を収集した。これで雑誌が散逸するなどして収集できなかった数編を残し、すべての未収録作品を収集したことになる。出典不明作品の調査は、図書館等における調査の結果、平成 25 年度も約 100 編の初出を明らかにした。『小説全集』未収録作品をふくめた未明小説の再検討は、「小川未明小説研究会」の活動のなかで本年度も継続的に実施した。成果の一端を『解説小川未明小説１』（永田印刷出版部、平成 26 年 3 月）にまとめた。また平成 26 年 3 月 15 日（土）に、シンポジウム「小川未明小説の再検討」を開催し、これまでの研究内容を深めるとともに研究成果を社会に還元した。
　シンポジウムの特別講演とパネル・ディスカッションのテーマは以下のとおりである。特別講演：水戸千秋「浄土」、李艶「烏金」、胡雲博「雪」、里見岳夫「戦争」、関根久美子「彼等の行く方へ」、小埜裕二「未明小説の三傾向」。パネル・ディスカッションのテーマ「小川未明小説の再検討」（共同討議）。
　未明童話と小説の関わりについての研究成果は、『新選小川未明秀作童話 40 灯のついた町』（蒼丘書林、平成 25 年 9 月）の解説「小川未明〈大人の童話〉の位相」にまとめた。
　『小説全集』未収録作品の書誌情報等の公開ならびにテクスト公開は、『小川未明小説書誌』（平成 27 年刊行予定）及び『小川未明新収小説集』（平成 27 年刊行予定）の出版を通して行う予定で現在、準備を進めている。

（２）項目別研究成果概観。
①　『小説全集』全 6 巻の収録小説数は小説 158 編、評論 95 編の計 253 編である。全集刊行時点で小説その他存在が明らかになっていたものは 1350 編（うち初出が判明しているもの 950 編、不明 400 編）であった。後の調査で新資料と呼びうる未明作品が約 650 編あることが明らかになったために、計 2000 編が現在、童話以外の未明作品の数としてカウントできる。
　『小説全集』未収録作品約 1750 編のうち、ほぼ全編を収集した。内訳は、小説約 500 編、詩 100 編、その他 1100 編である。単行本収録作品は単行本から、単行本未収録のものは初出誌から、単行本未収録で初出誌不明のものは出典調査の結果をまって収集を行った。雑誌が散逸するなどして収集不可能な数編を除き、テクスト収集についてはほぼ目的を果たすことができた。

②　『小説全集』刊行時、小説その他作品の存在が明らかになっていたものは約 1350 編で、そのうち初出が明らかになっていたものは約 950 編、初出不明は約 400 編であった。後に約 650 編の新資料を発見したことで総数は約 2000 編となったが、約 650 編はいずれ

も初出誌が分かっているものであるから、初出誌不明の作品約 400 編について調査を行った。

結果、新たに初出誌紙を明らかにすることができたのは約 250 編であった。上記の数を合計すると、当初から判明していた約 950 編に加え、新たな判明分約 250 編、加えて新資料約 650 編の計 900 編を加えると約 1850 編の初出が判明したことになる。現時点での不明作品数は約 150 編である。約 150 編の初出誌の調査は、今後も継続して続けていく。

③　未明小説の再検討については、「小川未明小説研究会」の活動を通じて成果を得た。平成 23 年 12 月から毎月 1 回、計 27 回の研究会を市民約 30 名とともに行った。『小説全集』全 6 巻を 18 回かけて読了したのち、『小説全集』未収録作品を読んだ。

研究成果は、平成 26 年 3 月 15 日（土）に「小川未明小説の再検討」をテーマにシンポシウムを開催し、これまでの研究内容を深めるとともに研究成果を社会に還元した。また小埜裕二編『解説小川未明小説 1』（永田印刷出版部、平成 26 年 3 月）にまとめた。成果の内容は以下のとおりである。（小埜による巻末解説「未明小説の三傾向」を一部要約したうえで引用。）

未明は厳密なジャンル意識のなかで創作する作家ではなかったから、童話的な小説もあり、小説的な童話もある。同様に、小説と小品、小品と随筆、随筆と感想の間の境界もはっきりしない。小説の数をあえて挙げるなら、700 編は超えると思われる。童話は短いものが多いが、小説は長いものもある。短編小説から中編小説の間くらいの長さである。そうした小説を未明は、明治末から大正末まで休むことなく書き続けた。小説の仕事は、未明が生涯に書いた童話約 1200 編の仕事に匹敵する。

未明文学の原点は、ふるさと高田の子供時代にあった。冬の厳しさ、雪の恐ろしさは、子供の未明に強烈な印象を与えた。ひとり子の未明は、他に住む者のない春日山の中腹で、自然と対峙した。子供と大人、田舎と都会、自然と人工、貧しさと豊かさ、裏と表、暗と明、弱者と強者といった対比関係において、つねに劣位の側に未明は自身をおいた。冬の暗さ、雪の猛威に打ち克つことができない人間の弱さや命のはかなさを熟知しつつ、助け合いながら暮らす田舎の人々のありようを未明は人間本来の姿と考えた。19 歳以降、未明は東京に住むが、終生、雪国の憂鬱で暗い自然をおのれの視座とした作家である。未明の文学は、裏日本と呼ばれた土地に根を張り、雪や風を栄養として育った。貧しい者、弱い者の味方であった。

そうであればこそ、小説家としての未明は、明治末から大正期にかけて、十分な脚光を浴びえなかった。暗いもの、貧しいもの、弱いものの叫びに、積極的に耳を傾ける読者は当時も今もそう多くはないからだ。

未明の小説家としての態度・傾向は 3 つに分けられる。素朴なナチュラリズム、ネオ・ロマンチシズム、社会主義の態度・傾向の変化である。第一の特徴は、最初の小説集『愁人』（明治 40 年 6 月、隆文館）の「序文」で坪内逍遥が書いたような、瞑想の人、空想の人としての未明が描いた小説世界の特徴である。未明が大学時代に影響を受けたラフカディオ・ハーンの作品がもつ愁いや憧れの要素を引き継ぎ、未明自身の感懐・追懐を多く含んだ、一種、老成した静かな小説世界となっている。この時期の特徴は、明治 40 年頃までの小説に見られる。「浄土」「霰に霙」「人生」「空想家」「日本海」等がその代表作となろう。

第 1 の特徴である愁いや追懐は、やがてそれ自身が焦点化され、仮構された小説世界のなかで展開されるようになっていく。「病作家」や「海鳥の羽」を経由し、明治 41 年に発表された「曉」「櫛」にいたると、第 2 の特徴であるネオ・ロマンチシズムの傾向が見えてくる。自己自身の感懐を詩的に表現することから、現実を見据え、人間の暗さを煮つめ、凝縮したものを、仮構された小説世界のなかで描きだすことへ、その小説世界は深化、拡がりを見せる。明治 42 年発表の「烏金」「黄色い晩」、44 年発表の「物言はぬ顔」「星を見て」、45 年発表の「凍える女」、大正 3 年発表の「白と黒」「鮮血」など、この時期の未明小説は、当時、流行した自然主義より、はるかに純度のたかい現実を描きだそうとしていた。未明は真実を描くために、現実を自在に操作した。未明の小説は、未明自身のリアルな体験を素材とし、それを組み合わせた虚構であって、自然主義作家が描いたような現実そのものを描いたものではない。

この時期、未明が捉えた現実の姿や人間の姿は、暗い。若くして家族をもった未明は、小説だけでは食べていくことができず、大正 3 年と 7 年には、2 人の子供を貧しさのなかで亡くしている。未明自身、狂気にとりつかれたような重苦しい小説世界が展開する。人生の悲哀や苦痛、人間の弱さや孤独、狂気を小説世界に描き出す。大正 3 年発表の「血に染む夕陽」、4 年発表の「町裏の生活」、大正 7 年の「無籍者の思ひ出」「負傷者」「根を断れた花」、8 年発表の「浮浪漢の手紙」はそうした小説である

未明の小説は、人間や現実を見つめる一方、そういう人間や現実を作りだす社会の矛盾へと目が向かっていく。未明は、近代の資本主義や功利主義がもたらした人間の驕りや過誤を批判し、改めようとした。それが未明小説の第 3 の特徴となる。未明は階級社会の改造を訴えた。強者と弱者の間に生じる階級意識がひき起す問題を社会主義の考えにのっとって解決しようとしたのが、この時期の小説である。大正 3 年発表の「無智」に早く

も社会主義的な思想は表れるが、この傾向が顕著になるのは大正6年発表の「小作人の死」、7年発表の「文明の狂人」「靴屋の主人」前後からである。大正9年には「無産階級者」を、10 年には「老旗振り」を、11 年には「血の車輪」「彼等の行く方へ」を、12 年には「土地繁栄」を、14 年には「堤防を突破する浪」を、15 年には「君は信ずるか」「彼と三つの事件」などの小説を発表している。

未明は社会主義につよい関心を示し、社会改造を求めるが、革命のための闘士を育てる文学といった、当時の社会主義運動の組織的で機械的なプログラムに反対し、小説家として、知識階級がどのように社会改造に関わるべきかを考えた。未明は、階級意識だけが社会問題がひき起こすのではないという。善良な大人であっても、ちょっとした心の緩みや疲れから弱い者の心を傷つける。人間の心の問題に深く入り込んで未明は小説を書いた。貧しいものの中に、入れ子のように上下関係が生じることも、未明は大正10年発表の「火を点ず」の中で描いている。同様に、貧しいものが自分たちの生活を守るため、富めるものに服従する弱さも指摘している。本来あるべき人間の自由な姿、それに向かって共に助け合って生きていくのが人間の「真実」の姿であるはずなのに、その真実をふみにじることが、富めるものの側にも貧しきものの側にもあることを未明は「真実をふみにじる」(昭和3年）の中で書いている。

大正期半ば、第2の特徴をもった未明の小説が人生の悲哀や苦痛、人間の弱さや孤独、狂気を深く描きだすことで、その重さを増し、小説自体が悲鳴をあげるにいたると、未明はそうした人間をとりまく社会を改造する第 3 の特徴をもった小説を書くようになる。劣位に置かれた人間をどのように救い出すのか、その答えが社会主義思想に求められると未明が考えた時期は確かにあった。しかし前述したように、未明は社会主義思想そのものを全面的に受け入れることはなかった。

未明は袋小路のような第2の特徴をもった小説の暗さを脱するように、社会主義的な小説を書くのであるが、これとほぼ同時に、小説と並行し、大正8年頃から旺盛に童話を書くようになる。未明が見据えた現実世界の果てから、社会主義的な小説と童話が生まれたことになる。それは未明にとっての2つの希望の芽であった。

大正 15 年、未明はいわゆる〈童話作家宣言〉を行い、2 つに別れた道を、社会主義的な小説から童話へと 1 つの道にあらためる。これは当時の未明の意識からすれば、〈統合〉であったろう。未明は、現実の社会を改造するために、将来の大人である、子供に語りかけようとする。そうして選ばれた一本道が正しかったかどうかは分からない。ただ、未明の小説の変遷をたどると、未明にしか書けない興味ぶかい小説も多数あり、続けて小説を書いていたなら、第4の特徴と呼びうる次の展開もあったのではないかと惜しまれる。

④　『小説全集』未収録小説等の書誌情報に関する研究成果は、『小川未明小説書誌』（出版社未定、平成 27 年 3 月刊行予定）により公開する。初出誌紙情報、収録小説集状況、約 2000 編の全作品あらすじ、索引、研究文献書誌、年譜等を本書に収める予定である。収集した『小説全集』未収録作品は、今後、既刊『小川未明新収童話集』全 6 巻と同様、文字化して刊行する予定である。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１件）

小埜裕二、〈小さいヒーロー〉から〈戦うヒューマニスト〉へ―小川未明「眠い町」論―上越教育大学国語研究、査読無、28 号、2014、pp.1－12

〔図書〕（計６件）

① 小埜　裕二　他、永田印刷出版部、解説小川未明小説 1、2014、300
② 小埜　裕二、日外アソシエーツ、小川未明新収童話集（全 6 巻）、2014、各巻 300
③ 小埜　裕二、蒼丘書林、新選小川未明秀作童話 40 灯のついた町、2013、300
④ 小埜　裕二、日外アソシエーツ、小川未明童話書誌、2012、400
⑤ 小埜　裕二、蒼丘書林、新選小川未明秀作童話集 50 ヒトリボッチノ少年、2012、300
⑥ 小埜　裕二　他、北越出版、解説小川未明童話集 45、2012、334

〔その他〕

ホームページ等

http--sun-cc.juen.ac.jp8080-~yuji-

６．研究組織

(1)研究代表者

小埜　裕二（ONO, Yuji）
上越教育大学・大学院学校教育研究科・教授
研究者番号：00204256